

俳句への興味・関心が俳句の情緒的意味の評定に及ぼす影響

—創作経験の少ない鑑賞者を対象とするSD法による検討—

皆川直凡*

印象、力動、技巧の各因子5対ずつ計15の形容詞対から成る Semantic Differential 尺度を構成し、教科書俳句の情緒的意味の評定を求めた。創作経験の少ない大学生100名を研究協力者とし、評定対象の俳句を知っているかどうかの回答と情緒的意味の評定を求めた。割り当てられた俳句の半数以上が既知の協力者を高興味群、既知が8分の1以下の協力者を低興味群とした。その結果、高興味群ではすべての因子において明瞭な個人差が認められたが、低興味群では、印象因子での個人差のみが見いだされた。俳句に興味・関心のある人が俳句を鑑賞する際、俳句のもつ特徴を詳細に分析したうえで、いくつかの観点を総合して評価をおこなうのに対し、俳句に対する興味・関心の低い人は、全体的な印象や好みに依存して評価をおこなうために、このような評定傾向の差が生じたと考えられる。

[キーワード: 俳句, 興味・関心, 情緒的意味]

1. 序論

俳句は十七文字という字数制限があるが、文章の一種である。文章の理解に関する心理学的研究では、主として散文、それも評論文や論説文を題材として、文章の論旨をどれだけ正確に理解するかという、知的・論理的理解の問題の検討が行われてきた。一方、俳句、短歌といった韻文や、散文のうち物語文などの言語芸術は、心理学の研究対象とされることが少なかった。波多野(1935; 1953)が日本における短詩型の表現上の特徴に注目し、計量的方法を用いて実作の分析を行い、短歌と俳句の表現特徴の違いが、31文字対17文字というサイズの違いに加え、動詞や形容詞を多用する短歌と、名詞を多用する俳句という用語法の違いによってもたらされることを実証したが、その後はあまり系統的な研究が行われてこなかったのである。

言語芸術は、作者の心的過程の具現化に他ならず、また読者との心的交互作用という観点からも、心理学の題材として非常に興味深い。言語芸術を研究対象とする場合には、知的・論理的理解の問題よりもむしろ、作者の心情や心象世界を想像したり追体験したりするといった、感性的・共感的理解の問題の検討が重要となる。こうした問題を検討するためには、読み手と題材との関わりの程度を考慮しなければならない。たとえば、読み手が特定のジャンルの言語芸術作品に対して日頃からどれだけ関心を抱いているかによって、それらの作品に対する見方、感じ方は異なると考えられる。

本研究では、多様な言語芸術のうち、日本発信の文化である「俳句」に着目する。俳句は、季節の風物と人と

の交感を十七音という制約のもとに表現しようとする極小サイズの定型詩であり、時代、世代、そして国境を越えて親しまれている。近年、情報伝達手段の発展により新たな展開を見せている。俳句には、古今の優れた作品に触れ、読みを深めるという楽しみ方と、自ら創作して情報を発信し、伝え合うという楽しみ方があるが、後者こそが俳句の醍醐味であるという考え方もある。実際、さまざまなメディアを通して俳句が発信されている。このような俳句の魅力を醸成する要因として、五七五の韻律、季語からの連想、「写生」による表層の風景描写と深層の心理描写との「意味の二重性」、複数の情景イメージの「取り合わせ」による句意の広がり等があげられる。こうした諸要因は、人間の内面に關わるものであり、心理学的アプローチの対象となりうるものである。その先駆的研究として、皆川・賀集(1990)をあげることができる。彼らは、語句関連度評定法(Levitt, 1970; 芳賀純, 1982)を用いて、「季語を中心として構成されている」という俳句の統語的特徴を明らかにした。しかしながら、人間の精神的所産であり、上記の特徴をもつ俳句についての理解を深めるためには、統語面に加え、情緒面からの分析が求められる。

情緒面からの俳句の分析を考えた場合、俳句に対する興味や関心が俳句に対する感じ方に何らかの影響を与えていることが予測される。俳句への興味・関心の程度についての指標のとり方にはさまざまな考え方があがるが、本研究では、その指標として、俳句の創作経験の少ない人が知っている俳句の数を考える。つまり、多くの俳句を知っている人ほど俳句に対する興味・関心が高いと考えるのである。また、俳句に対する感じ方の指標として

は、Osgood, Suci & Tannenbaum (1957) に始まる Semantic Differential 法 (SD 法) による情緒的意味 (内包的意味) の評定を用いる。俳句への興味・関心が SD 法による俳句の評定に及ぼす影響を調べる。

皆川 (2005 a) は、「SD 法で用いられてきた標準的な形容詞尺度は、広範な対象に適用しうるとされるが、その半面、各対象の特徴が不明瞭になる可能性もある」として、標準的な形容詞尺度に加え、評定しようとする対象の特徴に対して、より敏感な形容詞尺度を選定することを試みた。岩下 (1983) の解説にしたがい、300 名の大学生を対象に SD 法による俳句の評定を求め、その結果について因子分析をおこなったところ、Osgood ら (1957) に類似した 3 つの因子が抽出された。第 1 因子は、作品に対する全体的な印象・感じを表すと考えられる尺度が多く含まれていたことから、印象因子と命名された。第 2 因子は、力量性と活動性を表現する尺度が混在していたことから、俳句鑑賞時には両者がまとまって作用すると解釈され、力動因子と命名された。また、この因子の得点が低いということも特徴の一つと考えられることから、静穏因子と名付けることもできるとされた。第 3 因子には、俳句表現の巧みさ、あるいは作品としての価値に関わる尺度が多く含まれていたことから、技巧因子と命名された。また、この因子には、リズム感がある (ない) という尺度が含まれていたことから、リズムのよさが作品評価の基準となる可能性が高く、それは俳句が韻文であることの反映であると考察された。本研究では、このようにして皆川 (2005a) が見いだした、俳句の情緒的意味に関わる 3 つの因子について 5 対ずつ、計 15 の形容詞対を選定し、SD 評定尺度を構成する。その構成内容は、方法の項で詳述する。

2. 方法

刺激材料 皆川 (2005b) が一般大学生を対象に小学校や中学校の国語の教科書に採録されている俳句 90 句の熟知度を測定した結果を参照し、少なくとも 2 名以上の大学生が知っていると言った俳句 40 句を選定した。近世と近・現代が 20 句ずつとなるように、また、詠われている季節が 10 句ずつとなるように選定した。各季節から 2 句ずつ選んで 8 句を 1 群とし、5 つの俳句群を作成した。作者名とその採用句数は、以下の通りとなった。松尾芭蕉 10 句、与謝蕪村 6 句、小林一茶・高浜虚子各 3 句、正岡子規・水原秋桜子・山口誓子・中村汀女・中村草田男各 2 句、加賀千代女・飯田蛇忽・村上鬼城・高野素十・橋本多佳子・川端茅舎・加藤楸邨・石田波郷各 1 句。俳句を 5 群に分ける際、同じ作者の句が一群に偏らないように配慮した。たとえば、松尾芭蕉の句は、1 群に 2 句ずつ割り当てた。

評定尺度 皆川 (2005a) の結果に基づき、俳句の情緒的意味を 3 つの因子に解析する尺度として、以下のような形容詞対を選定した。印象因子: 「明るいー暗い」「温かいー冷たい」「嬉しいー悲しい」「若いー老いた」「瑞々しいー枯れた」。力動因子: 「迫力があるー迫力がない」「激しいー穏やかな」「男性的なー女性的な」「大きいー小さい」「速いー遅い」「動的なー静的な」。技巧因子: 「深みがあるー深みがない」「洒落ているー野暮っぽい」「おもしろいーつまらない」「リズム感があるーリズム感がない」。これら計 15 形容詞対により 7 段階の SD 評定尺度を構成した。

研究協力者 二つの大学の 2・3 年生計 100 名 (平均年齢 21.5 歳: 20~26 歳) を 5 群に分け、5 つの俳句群をそれぞれ割り当てた。彼らのなかに俳句の解釈や鑑賞を専門分野とする学生はおらず、また俳句の創作経験も少なかった。いずれも、本研究に参加するまでに授業等で 1~2 句を作ったことがある程度であった。

手続き B5 判 9 頁の小冊子 (表紙 1 頁、評定対象・評定尺度 8 頁) を配布し、まず、性別と年齢の記入を求めた。そして、実験者が小冊子のフェイスシートに記載した教示を読み上げながら回答方法を説明した。その過程で、俳句の基礎・基本についての説明 (季語、十七音) もおこなった。SD 評定尺度への回答とともに、当該俳句を知っているかどうかの判断を求めた。各頁における SD 評定に先立ち、評定対象である俳句を知っていれば「○」を、知らなければ「×」を付けるように教示した。すべての実験参加者が評定方法を理解したのを確認した後、2 頁目に進んで評定を始めるように指示した。それ以後は、各参加者のセルフペースでおこなった。まず、40~50 名前後が受講している 2 つの授業において集団実施し、評定対象として、評定対象の項に示した 5 群の俳句 (8 句ずつ) をランダムに割り当てたが、各群の人数に不均衡が生じたため、のちに上記いずれの授業も受講していない大学 3 年生を対象に個別配布をおこない、最終的に 1 群あたり 20 名の被験者を確保した。なお、俳句の提示順序は、昇順 (春・夏・秋・冬) と降順 (冬・秋・夏・春) の 2 パターンを用意した。また、評定尺度については、左右の入れ替えにより、2 パターンを用意した。

3. 結果および考察

5 つの俳句群別に既知俳句数の人数分布とその平均値ならびに標準偏差 (SD) を算出し、Table 1 に示した。

Table 1 に示すように、俳句群によって既知俳句数に多少の違いが見られるが、8 句のうち半数の 4 句以上が既知である協力者と、全句が未知または既知が 1 句のみ

俳句群	既知俳句数								群別集計		
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	平均	SD
1	0	3	5	4	5	2	1	0	0	3.05	1.43
2	3	0	6	5	5	0	1	0	0	2.65	1.53
3	1	4	3	7	3	1	0	0	1	2.80	1.77
4	3	4	6	2	3	1	1	0	0	2.25	1.68
5	1	8	7	1	1	1	1	0	0	2.00	1.49
全体	8	19	27	19	17	5	4	0	1	2.55	1.60

である協力者は、俳句群によってあまり変動しないようである。言い換えれば、前者は俳句に対する興味・関心が高い群（＝高興味群）、後者は俳句に対する興味・関心が低い群（＝低興味群）と考えることができる。既知俳句が2句あるいは3句の協力者については、中程度興味群と考えることもできるが、俳句群によって変動する可能性もあり、5群の既知俳句数が均等になるように調整した上で検討する必要があると考えられる。そこで、本研究では、すべての俳句群をとおして、無作為に割り当てられた8句のうち半数の4句以上が既知であった計27名を高興味群、8句すべてが未知または1句のみが既知であった計27名を低興味群として、以下の分析を進めることにする。

各研究協力者の評定結果から、印象、力動、技巧の3因子得点（＝評定値合計を各因子の尺度数で除し、7点満点とする）を算出した。因子得点は、高興味群・低興味群各27名につき8個ずつ得られたため、全部で8×27＝216個存在する。これらの平均と標準偏差（SD）を算出した。その結果をTable 2に示す。

Table 2 俳句への興味の高低別にみた因子得点

		因子		
		印象	力動	技巧
高興味群	平均	4.1	3.9	4.6
	SD	1.43	1.26	1.07
低興味群	平均	4.1	4.0	4.4
	SD	1.00	0.85	0.74

Table 2に示すように、因子得点の平均値では、印象、力動、技巧の3因子とも、大きな群間差は認められない。しかしながら、SDをみると、因子の種類にかかわらず、

高興味群のほうがかなり大きくなっている。評定者間、俳句間、それぞれの平均とSDを群別に算出したところ、高興味群では、評定値の個人差も、俳句による評定値の差も大きいのにに対し、低興味群では、評定値の個人差のみが大きく、俳句による評定値の差は比較的小さかった。俳句に興味・関心の高い人が明確な評価基準をもち、俳句の内容を詳細に分析したうえで弁別した評価を行うのに対し、興味・関心の低い人は評価基準が定まらず、俳句を分析的にとらえることができないために、このような評定結果の差が生じたと考えられる。

高興味群における評定結果について、評定尺度の項で示した3つの因子別にみると、いずれの因子においても明瞭な個人差が認められた。印象、力量、技巧の各因子

それぞれにおいて、評価のしかたには個人差があり、それぞれの基準において、印象のよさ、力動性あるいは静穏性の高さ、技巧性の高さなどを評価する傾向が見られた。すなわち、人それぞれの基準や観点を定めただうえで、印象のよい句、力量感と躍動感にあふれる句（あるいは静かで穏やかな句）といった判断を下し、さらに創作面での技巧に優れた句とそうでない句との選別をおこなっていた。これらの結果は、俳句に興味・関心のある人が俳句を鑑賞する際、俳句のもつ特徴を詳細に分析したうえで、いくつかの観点を総合して評価をおこなうということを反映していると考えられる。

一方、低興味群では、印象因子での個人差が比較的大きく、他の2因子では明確な評定傾向の個人差を読み取ることはできなかった。この結果は、俳句に対する興味・関心の低い人が俳句を鑑賞する場合、まず、印象のよさによって評価を行い始めるということを示唆していると考えられる。これには、個人の好みと大きく関わっている可能性がある。

本研究の協力者は、俳句の創作経験の少ない大学生（若年成人）に限られたが、本研究の成果をより確かな物にするためには、俳句の実作者を含む習熟度の高い研究協力者、さらにはより幅広い年齢層による検討が必要であろう。

4. 総合論議

本研究では、俳句の鑑賞と創作の両面において熟達者ではない大学生を研究協力者とし、小・中学校の国語の教科書に採録されている俳句を刺激材料として、既知判断課題およびSD評定課題を実施した。既知判断課題の結果、100名の評定者は無作為に割り当てられた俳句の半数以上を知っている27名の高興味群と、無作為に割り当てられた俳句の大半を知らない27名の低興味群と、両群の中間に位置する46名に分かれた。SD評定課題の結果、印象、力動、技巧の3因子得点の平均値には、高興味群と低興味群の差は認められなかったのに対し、各因子得点の個人差には群間差が認められた。高興味群ではすべての因子での個人差が大きかった。これに対し、低興味群では、印象因子での個人差のみが見いだされた。上記のことから、俳句への興味・関心の高まりとともに、言い換えれば俳句に対する習熟度が高くなるにつれて、俳句の鑑賞や評価の基準は、直感的な印象を中心とした浅い理解から、俳句の表現技法を勘案した分析的かつ総合的な深い理解へと変容すると推論しうる。

皆川（2005c）は、著者自身の俳句集に対する、俳句の実作者（大半が40歳以上）の鑑賞文を収集し、その中から鑑賞者の選択した俳句を抽出することによって、まず鑑賞者による俳句の選択傾向を分析した。その結果、俳

句の選択傾向はかなり分散しており、10%以上の共鳴者を得た作品は上記の俳句集所収の232句のうち32句にすぎなかった。この結果は俳句の選択傾向は全く一貫性のないものではなく、読み手に好まれる句とそうではない句がかなりの一貫性をもって存在することを示していると考察された。また、この研究における鑑賞者は俳句の一般作者と指導者という2つの層から成り、その選択傾向や鑑賞の仕方にはそれぞれ特徴があることが見いだされた。その特徴を明らかにするために、皆川(2005c)は一般作者と指導者の鑑賞文の内容を計量国語学的ならびに言語心理学的な手法を用いて分析し、どのような観点で俳句が選ばれ、それらに対する鑑賞がどのような言葉で表現されているかを検討した。その結果、一般作者が主として、俳句に対する「好み」を選択の基準とし、全体的な印象を記述するのに対して、指導者は俳句の用語や修辞法といった表現技法の質を選択の基準とし、より分析的な形容表現を用いて鑑賞することが明らかとなった。たとえば、一般作者の鑑賞文では、好きな、素晴らしい、感銘した、心に残る、といった全般的・単一的表現が用いられることが多いのに対して、指導者の鑑賞文では、「対象を直感にしたがって正確に描く」「満足感とやすらぎの気持ちがよく表現されている」「自然との対話を楽しみ、豊かに詠いあげている」といった分析的・複合的表現が用いられることが多かった。このように、一般作者と指導者では、選択の観点と鑑賞の方法が異なることが明らかとなった。

皆川(2005c)と本研究では研究手法を異にするが、両研究の結果は、矛盾しない。いずれも、俳句に対する習熟度が高まるにつれて、選択の基準が好みから技巧へと変化し、鑑賞の方法が全体的・単一的なものから分析的・複合的なものへと変化する可能性を示唆している。皆川(2005c)の研究協力者は俳句の実作者で大半が40歳以上であったのに対し、本研究の協力者は、俳句の鑑賞や創作経験の少ない大学生であった。両研究の成果をより確かなものとするためには、それぞれの研究手法を異なる研究協力者、つまり俳句の習熟度レベルの異なる研究協力者、幅広い年齢層の研究協力者に適用し、包括的かつ総合的な分析を進めることが必要であろう。

こうして、まず俳句の鑑賞面の研究を進めてきたが、俳句という短詩型の魅力を考えたとき、創作面の心理学的分析も不可欠となる。たとえば、年齢、性別、パーソナリティ、創作経験年数、創作における熟達レベル、特定の俳句会に所属しているか個人で創作しているかといった立場の違いなど、主体の特性による俳句の創作の過程や手法の相違点の分析も、俳句の創作と鑑賞に対する心理学的アプローチの手がかりとなるであろう。また、師弟関係と創作・鑑賞の視点との関わりも、心理学的に

興味深い。鑑賞と創作の両面からの心理学的アプローチは、俳句の魅力についての考察を深めるだけでなく、俳句という日本発信の文化の探究をとおして、日本人の心性にせまる糸口にもなるであろう。

引用文献

- 芳賀純 1982 言語的直観の分析 日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 766-767.
- 波多野完治 1935 文章心理学 新潮社
- 波多野完治 1953 文章心理学入門 新潮社
- 岩下豊彦 1983 SD法によるイメージの測定 川島書店
- Levelt, W. J. M. 1970 A Scaling approach to the study of syntactic relations. In d'Arcais, G. B. Flores & Levelt, W. J. M. (Eds.) *Advances in psycholinguistics*. North-Holland Publishing Company. Pp.109-121.
- 皆川直凡 2005a 俳句の心理—鑑賞編— 『俳句理解の心理学』第4章 北大路書房
- 皆川直凡 2005b 俳句の心理—基礎編— 『俳句理解の心理学』第2章 北大路書房
- 皆川直凡 2005c 俳句とは何か—心理学との接点を探る— 『俳句理解の心理学』第1章 北大路書房
- 皆川直凡・賀集寛 1990 俳句を構成する語の相互関連度と俳句に対する共感度との関係 計量国語学, 1990, 17, 6, 265-272.
- Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. 1957 *The Measurement of Meaning*. University of Illinois Press.